



想文研だより

2015年6月
Vol. 1(創刊号)

発行/NPO法人 想像文化研究組織編集室

658-0003 神戸市東灘区本山北町6丁目2-13 メール/ici.uemura2010@gmail.com 電話/080-8946-5171

合言葉は想像力！

NPO法人 想像文化研究組織理事長 上村くにこ

母が68歳になったときこう言いました。「こんな年寄りになるなんて、想像もしてなかったよ」。

まこと自分が年をとったり、死ぬことを想像することは難しい。体はおとろえてゆくのに、魂だけはどんどん若返るような気がします。そのギャップに言葉を失うこともしばしば。

私たちNPOの合言葉は「想像力！」です。高齢になると「こうでなければならない」とか「こうであるはずだ」というような、今までよりどころにしていた常識がガタガタと崩れることが日常的に起こります。若い人の話す日本語が外国語のように聞こえたり、3ケタの暗算ができなくなったり、向うから来るあのよぼよぼの老人は誰？と、思っていたら鏡にうつっている自分だったりします。

このときこそ想像力を働かせるときではないかと思えます。いままで見えなかったものが見えてくるのですから、これこそチャンスと思いたいのです

新しい自分に何が起こるかをしっかり観察し、自分とまわりがそれによってどう変わるかを好奇の目で見てゆきたいと思います。しかしそ

んな変化を楽しむ元気な想像力は、なかなか一人では出てきません。体験を話したり聞いたりして、笑いあい、共感し合う自由な場が必要です。私たちはゆるやかに楽しい場を教室や紙上に創りたいと思っています。年をとることは必ずしもマイナスではありません。時代も自分も激しく変わってゆきます。無くしたからこそ、今あるものの意味が鮮明に見えてきます。

見えないものに目をこらし、聞かえない音に耳を澄ましましょう。



カフェ・タナトロジー

1学期これからのプログラム

カレッジICI

モダンシニアのおしゃれ学

～ユニバーサルファッションの時代へ～

6月27日(土) 14:00～16:00

神戸芸術工科大学教授 見寺 貞子

歳を重ねてもおしゃれに気を使って、イキイキと輝いている素敵なシニア世代が増えています。三寺先生におしゃれすることの効用、楽しさを学びます。

★多数のご参加をお待ちします

歴史に観る日本人の死生観

日本近代の死生観～「お迎え」は来るのか？～

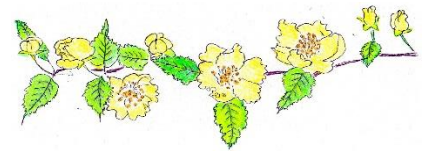
7月11日(土) 14:00～16:00

金城学院大学准教授 桐原 健真

吉田松陰の思想と行動の研究で著名な桐原先生に日本近代の死生観を語っていただきます。現代の日本人の死生観にどのような影響が？ 興味津々です。

★多数のご参加をお待ちします

イベント報告



上野千鶴子トークショー ～私たちのラストステージ～



上/4名の発言者がそれぞれの立場からの思いを発表。
右/上野さんを挟んで、発言者の小林文夫さんと上村理事長



昨年11月29日、近年は高齢者問題に取り組んでいる「おひとりさまの老後」の社会学者・上野千鶴子さんが「独りで死ぬための心構え」などを280名の参加者を前に熱いトーク。私たちの自律心を鼓舞する上野さんならではの講演でした。1部は「介護とケア」、要所に関西弁も出て、優しい口調ながら切れ味鋭い上野節が炸裂。2部は指定討論者やフロアの参加者との活発な意見交換。遠方からの参加者も多く、定員オーバーでお断りする方も出るほどの盛況でした。

パネルディスカッション ～老いの居場所を考える～



280人の参加者と3人のパネリスト。右からきらくえん理事長・市川禮子さん、在宅医療に取り組む長尾和宏さん、「つどい場さくらちゃん」理事長・丸尾多恵子さん

3月14日、ICI創立2周年記念イベント。在宅医療の草分け的存在、長尾さんの「在宅で、一人臨終を迎えるのは何も問題ない」。神戸須磨きらくえん理事長市川さんの、「どんなに重い障がいがあっても社会に受け入れられ、ごく当たり前の生活が保障されなければならないというノーマライゼーション理念の具体化に努めている」。介護する側には癒しの場が必要と、つどい場さくらちゃんを運営する理事長丸尾さんの「教育・教養（今日行くところがある、今日用が在る）が大切」などの言葉が印象的。満員の会場からも熱心な意見や質問が飛び出し、「もっと聞きたかった」「特養や集いの場などのいろんな情報が得られた」「時間が足りなくて残念」の声も聞かれました。

カフェ・タナトロジー

こ★ぼ★れ★ば★な★し

カレッジ ICI

二足のわらじ！ ～精神科医と落語家さん～ ～教室には笑顔がいっぱい～

2015年1学期最初のカフェ・タナに登場いただいたのは「笑いの効用」についてのお話と壱をしてくださった寿亭茱町（ことぶきていりゅうまち）こと精神科医の西松央一さん。自分が笑顔になると周りも笑顔になって、それが再び自分に返ってきて、NKキラー細胞が増え、免疫力が高まることという「笑顔のすすめ」。がん患者が落語や漫才を楽しんで、免疫力を高める療法などはよく知られている——そんなお話を絶妙の間と身振り手振りを交えての講義。休憩後は一転、出囃子とともに真紅の着物姿で登場！教室は即席の寄席に変身しました。笑いが絶えなかった会場からの「生活の中で精神科医と壱家さん、どちらのウエイトが大きいですか？」の質問に、「落語ですかね、高校時代からずっと親しんできましたからね」（笑い）

仏教系からミッション系へ

～歴史にみる「日本人の死生観」～ 古代編



「仏教の衝撃（インパクト）」—古代の宗教・神道に仏教がもたらされたことのインパクトについての講義をされた船田淳一先生。神仏習合とその儀礼を巡るの研究がご専門。これまでずっと、龍谷大学、佛教大学など仏教系の大学で教えたり研究されたり。「ところがこの4月からミッション系の金城学院大学の准教授になり、ミサにも出ています」とのこと。ますますそのご研究の思想史の世界が深まりそうです。現代とのかかわりについての『宿題』をもつての再登場が期待されています。

座右の書

神戸市灘区 岸本 正治

あらゆる仏典の中で、最古層にあるといわれているのが『スッタニパータ』第四章、第五章である。これを読み解き始めて、もう二十五年以上の歳月が流れた。『スッタニパータ』は中村元先生が岩波文庫から『ブツダのことば』として発刊されている。

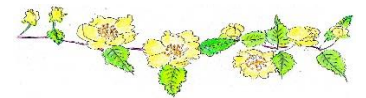
この『スッタニパータ』は第一章～第五章で構成されているが、この内、第四章と第五章が特に古いといわれている。先生はパーリ語から分かりやすい日本語に翻訳されている。しかし、正しく理解するのは難しい。

何が難しくさせるのだろうか？ハッキリしているのは、難しいのはブツダの言葉ではなく、自分自身であるということだ。自分が見えないから、自分がわからないから、ブツダのことばが難しくなっているということなのだ。

『スッタニパータ』は、まさしく座右の書であり続けた。まだ解けないところがあるが、冥土までもっていくつもりはない。この世ですべての疑問を解決したい。最後にブツダの次の言葉（前掲書より）を紹介する。

「いかなる所有もなく、執着して取ることがないこと、——これが洲（避難所）にほかならない。それをニルヴァーナと呼ぶ。それは老衰と死との消滅である」(1094)。

注：ニルヴァーナ=涅槃



BOOK★CINEMA★DVD



映画「おみおくりの作法」

ロンドンの各地区には孤独な死者をおくる公務員の民生係がいるが、この映画の主人公はその一人のジョン・メイ。44才独身で、この仕事を心こめ律儀に執り行っていた。だがリストラにあい、その最後の仕事として彼の身近でおきた年配のアル中の死者、ピリー・ストークの生前の類縁をたずね、葬送への参加を誘ってイギリス中をまわるが、そこで思いがけない故人の姿を知る。

彼が愛した北の海辺の町の女性の追憶。刑務所に収監されたときピリーの慈善募金のための荒行。フォークランド紛争の戦友は「ピリーは命の恩人だった」と。幼くして捨てられた娘は、訃報を伝えたジョンに心を開く。だが生前の類縁であるこうした人々を招いて、ジョンが中心になって執り行うはずだったピリーの葬送の場にはジョンは現れることはなかった。映画はジョンを見舞う奇跡の暗転で終わる。

現代社会の孤独死もその生涯にはヒューマンな物語が隠れており、それに思いを致すとき静かな感動がわき起こる。(宮城公子)

監督・脚本・制作 ウンベルト・バズリーニ 2013年イギリス/イタリア 91分ベネチア映画祭オリゾンティ部門 監督賞受賞作品、その他種々の受賞歴。

八上桐子の 川柳の窓

選者 八上 桐子

元時実新子主宰「川柳大学」会員
神戸新聞文藝川柳壇選者など多方面
で活躍の川柳作家

昨年秋に開催の「カフェ・タナ川柳講座」のご縁で、こちらに川柳の窓を開いていただくことになりました。この小さな窓から何が見えるのか、たのしみです。
死にたいね死にたいねとて生きており 未羊

みよう

講座の折の3分吟、題「笑う」の秀句、森美樹よしきさんの作品。柳号の未羊みようは羊年生まれで、「何でも見よう」「みようみまねで川柳に挑戦しよう」からとか。「笑う」から「死」の連想に驚くことも、その安らかさ、おおらかさに参りました。このように、ことばで新しい私や詩を発見するのにも川柳の魅力です。では私も「笑う」を一句。

よく笑う 毀れはじめているらしい 桐子

こわ

川柳募集 あなたの川柳をハガキまたはメールでお寄せください





「シベリアでの体験が私の死生観に影響しているようです」

6月には93歳という衣笠茂さん。甲南大の学長を務められるなど学者と指導者の道を歩んでこられました。青春時代は学徒動員で、満州に派遣され、戦後3年間、極寒のシベリアでの抑留生活を余儀なくされました。スマートで謙虚なお人柄、元祖・甲南ボーイの穏やかな笑顔の陰に「地獄を見た」シベリアでのつらい体験も。戦後70年、今回はあえてお話しくささいました。

93歳になりますから、最近では老化が進んでいます。ゴルフの飛距離も落ちていますし、先日も車でゴルフ場まで運転したのですが、たいそう緊張しました。そろそろ免許も返納しようかと思っています。歩けなくなったら困るので毎日30分ぐらいのところを往復して散歩中毒症のように歩いていますね。それと昨年腰を痛めたので、体操、ストレッチもやっています。それでも、昨日もバスに乗るのに40メートルほど走ったのですが、息切れして、バスの中でハアハアしました。学生時代、甲南の陸上部で走ってましたが、さすがに90歳過ぎるときついです。

最近はお付き合いする人たちも皆さん高齢になってきて、若い人と接することはめったにありません。時々我が家で、甲南大の交響楽団部や陸上競技部のOBたちとパーティーやりますが、皆さん歳を重ねてきて、60歳の方が来られると「今日は若い人が…」(笑)って。

甲南の旧制中学・高校時代は陸上部で短距離ばかりでなく駅伝のアンカーを務めたこともあり。やがて顧問の先生の影響で西洋史に興味を持ち、京大で学びました。ところが学徒動員で篠山連隊に入り、満州に見習士官として赴任しました。そこで終戦を迎えたのですが、そのままシベリアに抑留され、3年間を過ごしました。

食料はないし、強制労働させられる。戦場では人間の善が通じないで絶えず盗みや人殺しが行われている、そんな地獄を見たから「人間死んだらおしまいだ」という

消極的な哲学にシンパシーを持ってしまったのです。死ぬ時が来たらしようがない、それまでは本を読んで楽しもうと。極限のところを体験したから死を恐れないのではと言われるが、それはどうかわからない。僕は怠け者だから思想的に突き詰めないで、ぼやっとしてるだけかもしれないし、もって生まれた楽天性かもしれない。それでいて、悲観的なところ、どっか投げやりなところもあるんですね。それで生き延びたかもしれないし…。

1963年にハーバード大学に留学したとき、戦後日本の農地解放にかかわったというアメリカ人に会いました。「どう思うか」と聞くから「うちは地主だったけど、あの施策はよかった」と言ったら喜んでいました。私は無責任な三男ですから。それにちょっと客観的にみるという、それは甲南の創始者の平生さんの影響もありますね。平生さんはほとんどの財産を残さず、寄付された方です。

今日も友人と家内のお墓の話をしてました。迷ったのですが小さいのを作りました。

家内を5年間家で介護していましたが、医者のお勧めで胃ろうしたことをずっと悔やんできました。「可哀そうなことをした」と後悔しきりです。

でもある時、あなたの方の会の岡島さんに「衣笠さん、一生懸命介護したからそう思われるので、そうでない人はそんな風に思いませんよ」と言われ、ずいぶん慰めになりました。

募集

☆賛助会員募集します！

活動を理解し、支えて下さる賛助会員を募集します。賛助会員さんにはカレッジとカフェタナ受講券各1枚と年3回発行予定の機関紙をお送りします。年会費3000円です。ご連絡いただいた方には申込み用紙を送らせていただきます。

編集後記

★限られた紙面に、いかに多くの情報を的確に且つ分かりやすく書くか、今までは読み飛ばしていた新聞記事も、これを書いた記者殿に今では敬意を払っています。私の書いたのは単にイベント報告ですが、これだけで3時間はたっぷりかかりました。今後とも修業します。(大利敬郎)

★上村理事長から「機関紙を出したい」とのリクエストがあったのはいつのことだったでしょうか。パソコン教室で教わりながら手作りでのスタート。インタビューに応じてくださった衣笠先生はじめ川柳の八上桐子さん、プログラムに参加されている岸本さん、小林さん、森さん、ご協力ありがとうございました。今後、皆さんのお力で、このささやかな通信をより充実した紙面に育てていただきますよう、ご意見、ご感想、ご投稿をお待ちします。(井上由紀子)

送り先メール/ici. uemura2010@gmail.com

写真提供/小林文夫 イラスト/上村くにご 協力/ハロー!パソコン教室六甲校

